灯りが描き出すもう一つの風景

永田 宏和　*Written by Hirokazu Nagata*

「明日香の地を詠んだ万葉集の歌を書き込んだら？」村の寄り合いに参加していた一人の主婦が提案した。

街並み整備のコンサルタントとして明日香村・岡大字に入ったのが、そもそもの私の任務である。ところが街並み整備の話し合いは紛糾、矛先を変えるつもりで提案した灯り系のイベントが、その後、想像以上の発展をみせることになる。

冒頭の主婦のアイデアを受けて住民たちは「明日香の地を詠んだ万葉歌の一首を書き込んだ行灯」づくりを自分たちの手で進めていく。森林組合が調達した部材を組み、書道クラブのおばあちゃんが万葉集の歌の一首を書き、その書き込んだ和紙を、ふすま屋さんの指導のもと張る。初年度に300個の行灯が完成。秋の観月祭に合わせて行灯を通りに並べる「万葉のあかり」がスタートした。このイベントは好評を博し、春の「桜祭り」、大晦日の岡寺参道での点灯などさまざまな行事に展開されていく。

（撮影：伊東俊介写真事務所）

最初の寄り合いから2、3年経った頃、当初紛糾していた街並み整備の話は予期せぬ方向でまとまりをみせ始める。「この行灯が映える美しい街並みをつくろう」。それ以降、地域の街並み整備はこのテーマのもと話し合われている。

本格的な街並み整備は、さまざまな課題があって進んでいないが、街並みを考える際の軸となるイベントを獲得した住民たちは、今後もぶれることなく自分たちのまちにとってふさわしい街並みをつくりあげていくだろう。ハード優先で進められる傾向にある街並み整備だが、ソフト（イベント）から積み上げていくこうした手法は、今後の街並み整備を考える上で一つの礎になると思われる。

この「万葉のあかり」の成功以降、住民たちは土産用の「ミニ行灯」を製作、販売するなど活動の幅をどんどん広げているが、そんな中で一点気がかりなことがある。それは中心メンバーの高齢化である。

イベントを運営し、さらなる活動を展開するには若い力が必要である。幸い万葉集の里である明日香村には根強いファンが多い。こうしたファンをイベントのボランティアとして巻き込むのが理想的である。例えば、万葉集のファンに行灯の前に立ってもらい、書き込まれている一首の解説をしてもらうのもいい。

こうした応援団の獲得にはイベントのブランディングが重要である。「よい」ものを「よい」と伝えるのがブランディングの基本であり、その一つのきっかけとして私はプロのカメラマンによるイベントのベストショット（写真）の撮影とロゴマークのデザインを提案し、実践した。この二つの成果はホームページやポスターなどイベントの「よさ」を伝えるさまざまなツールに展開されている。こうしたツールをうまく活用して、このイベントに熱い思いを持つ仲間を集めていくことが重要である。

まちづくりは常にオープンであるべきで、その軸となる魅力的なイベントを自らの手でつくりあげた同地区のまちづくりは、今後ますます発展していくだろうし、そうあってほしいと心から願っている。

◆ **永田 宏和**（ながた・ひろかず）
（株）iop都市文化創造研究所代表取締役、NPO法人プラス・アーツ理事長。1968年兵庫県生まれ。91年大阪市立大学建築学科卒業。93年大阪大学大学院修士課程修了後に（株）竹中工務店入社、2001年に同社退社。まちづくり、アート、イベント、商業開発の企画・プロデュースなどを業務とする事務所『iop都市文化創造研究所』を設立。06年NPO法人プラス・アーツを設立し理事長に就任。著書は、『地震イツモノート』（企画、木楽舎）。